

植民運動前夜の英国経済(下)

——十六世紀の経済不況とその対応——

越 智 武 臣

二 十六世紀中期の経済不況(続)

ロンドン・アントワープ貿易を枢軸として、十六世紀のはじめ以来、さしも好況を謳歌するかのようにみえた英国経済も、世紀の半ばを過ぎると同時に、突如深刻な不況のなかに落ちこんでゆくことになる。近代初頭の英国経済史上に、はじめてこの重大な不況の存在と意味とを指摘したのは、いうまでもなく、一九四〇年に現われたフィッシャー教授の著名な論文「十六世紀英国貿易の趨勢と政策」Commercial Trends and Policy in Sixteenth Century England(『経済史雑誌』、第十卷、第二輯)であった。^①わが国英国経済史研究においては、その特異な問題関心から、これまでそれほど注目されてきたとはいえないが、この重要

論文が、経済史研究のみならず、一般に十六世紀英国史解釈のうえに投げかける暗示と意味は、実際無尽蔵なものであるように思われる。まず研究史的に言えば、それは従来ともすれば国内経済史的観点の優越という、いわば純粹培養的思考に、国際的契機を加味することによって、その固定化しなかった思考のフレームをおしひろげるものであったろうし、^②また経済の漸移的・自生的発展を説くにすぎなかった考え方に対しては、積極的に国民経済の屈折点を指摘することによって、十六世紀英国経済史上の時代区分をも可能にしたものであったと考えられる。政治史・思想史的研究にも及ぼすであろうその暗示については、いずれ叙述のなかで明らかとなつてゆくことであろう。

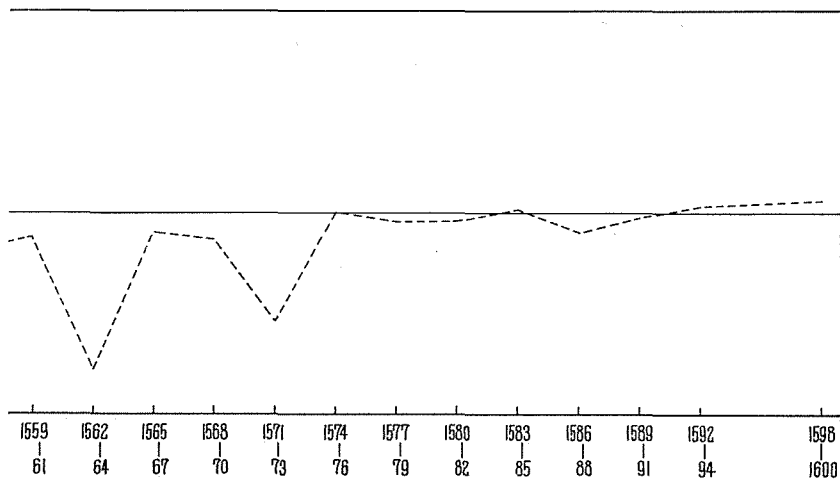
ところで、論文の基礎は、なんといっても、前掲シャ

ツの統計に続くものとして、フッシャー自身、苦心の結果あつめた世紀後半のロンドン港輸出毛織物統計にある。したがって、まずわれわれとしても、それからみてゆくことにしたいと思う。ちなみに六一頁の表がそれであり、上の図は理解を助けるために、筆者において作成したグラフである。念のため、いい副えておくが、世紀後半においても、ロンドン港は、全国毛織物総輸出量の「最大部分」を占めており、したがって、ロンドン貿易のカウヴが、ほぼ全国的な景気を現わすものとみてよいということである。さて、これを、前号掲載のシャンツの統計グラフと続けてくくってみれば、直ちに分ることであるが、フッシャー自身も説明を加えているように、まず五〇年代の初までは、戦争のための約十年刻みのスランプは別として(前号前掲グラフ参照)、世紀前半の好況が続いて、世紀初年に較べれば、約一五〇%という、異常なまでの輸出の伸びを示していることが分る。ところで、これと対照的に、この趨勢も世紀後半に入るとともに、直ちに不況の相を呈し、とくに、一五六二年―六四年、一五七一年―七三年と、二度の破局によって輸出货量は半減し、全体として世紀の三四半期は、二

五%の収縮をみせている。最後に、テューダー期のおわりの三〇年代は、相対的な安定をみせ、最高ブーム時代の二〇%減の数字を示しつつ、時代の幕を閉じるのである。すなわち、われわれはここに、明らかに景気の三つの交替を読みとることができる。としてみれば、次にわれわれにのこされた課題は、可能なかぎりこの交替の原因を探りだしてみることであろう。

① たとえば、ラムゼーも次のように言っている “The Great commercial crisis of the mid-sixteenth century was first discussed by F. J. Fisher in a notable article, ‘Commercial Trends and Policy in Sixteenth Century England,’ *Economic History Review*, X, (1939-40)”. Ramsay, op. cit., p. 250. もって、この論文の声価をはかるに足るのである。

② ここで、インタールウオー時代、二、三〇年代の歴史意識がいわゆる ‘conditions of England’ question であつたことを想起されたい。前号参照。これは、ある意味では、第二次大戦後約十年、わが国を支配した歴史意識とも相通するものであったといつてよからう。今日、本稿のアプローチを、流通主義の一語でもって片付けうると考えるものは、よもやあるまい。わが国で、本論文に注目しているものとしては、角山栄『イギリス絶対主義の構造』、昭、三三、四三頁以下、同『イギリス毛織物工業史論』、昭、三五、一四五頁以下、渡辺源次郎「近世初期



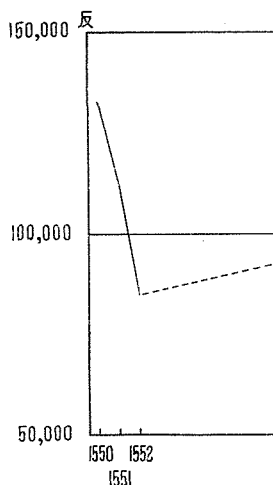
③

におけるイギリス重商主義」(『社会経済史大系』Ⅴ)、昭、三四、一五七頁以下。もちろん、管見の範囲に属したものである。

Fisher, op. cit., p. 153 (このでもケアラス＝ウィルソン編集書のページ数を示す)。なお、理由は分らないが、統計ははじめの三年間を

のぞき、三年平均の数字となっている。シャントと同じく、毎年の数字であれば、われわれの研究にも、もっと至便なものとなったろうと思われるが、いたし方ない。

世紀前半の好況を支えた原因として、アントワープ市場の展開があったことは、すでに述べた。ところで、いっぽうこの広大な市場を控えつつも、この景気の過熱のなかに、すでに不健全な兆候のひそんでいたことについては、時人もかならずしも盲目ではなかったようである。あたかも、このブームの絶頂期一五四九年に出版されたものと考証されている作者不詳の貴重な文献がある。すなわち、『イングランド王国の繁栄についての一論』(A Discourse of the Common Weal of this Realme of England) にはかならないが、この対話篇のなかで、一ナイトが論じているように、それはまず「ものが豊富にあるのに、物価騰貴がおこるといふ不思議」③として、時人の眼に映ってくる。すでにのべたような、囲込運動の進展、農民一揆、地方都市の衰微といった散発的な時代への不満も、結局はそこに帰着すると、対話者は考える。しかも、さらにその原因が、煎じつめれば、度重なる王室による貨幣の悪鑄にあったとま



ちに想起されるのは、かの新大陸発見以来の銀の流入と、いわゆる「価格革命」という現象であるだろう。周知のように、それはまずスペインに始まり、漸次ヨーロッパの諸国に波及し、十六世紀中葉から約一世紀のあいだに、ヨーロッパの物価水準は、約三倍に高騰したといわれている。しかし、英国史に即していえば、この国において価格革命のはじまるのは、その特異な位置から、大陸よりは約半世紀おくれ、一五七〇年代の前後であったというのが、一般の常識である。また、現在到達された研究の成果でもあるとしてみれば、十六世紀前半の物価の騰貴を、もっぱら貨幣の悪鋳に帰したかれらの観察は、少くとも当時としては、誤ってなかったというのが正しいだろう。問題は、貨幣の

で、かれらは推論することができたのである。ここで、物価の騰貴といえ、直

悪鋳が、外国貿易に及ぼす影響にある。この点、かれらは、外国商品の割高と、その結果としての財宝の流出という、まだ素朴な事実認識の段階にとどまっているが、この割高が、今日からみれば、悪鋳の結果としての国内商品の値上りとのあいだある時差に帰されるべきことはいうまでもなからう。^④ 一般に、悪鋳の結果としての外国為替の低落は、国内インフレーションに先行するものである。ことばを代えていえば、悪鋳の結果まず生ずべきは、国内商品の割高という現象であり、これこそ外国商人を利しつつ、実は世紀前半の輸出ブームを支えていたものにほかならない。「売値は安い、買値は高いでは、繁昌するわけはありません」という、これも前掲書にでてくるナイトのことばは、国際経済のカラクリではないが、少くとも結果だけ

年 代	反 数	年 代	反 数
1550	132,767	1574—76	100,024
1551	112,710	1577—79	97,728
1552	84,968	1580—82	98,002
		1583—85	101,214
1559—61	93,812	1586—88	95,087
1562—64	61,188	1589—91	98,806
1565—67	95,128	1592—94	101,678
1568—70	93,681		
1571—73	73,204	1598—1600	103,032

は、正しく把握していたものといえよう。この貨幣の悪鑄と輸出ブームとが、どのような関係にあるかは、前掲の輸出カーヴ（前号参照）と、貨幣悪鑄史の年代とを比較すれば、直ちに分ることである。よく知られているように、ヘンリー八世による貨幣の改悪は、一五二二年の対仏戦争とともに始まり、一五二六年の改鑄によって、ポンドの価値は、三二フランドル・シリリングから二六シリリング・八ペンスに低下した。そして、三〇年代には、ますます低下して、悪名高い四〇年代の「大改鑄」Great Debasement によって、最悪の年一五五一年初には、ポンドの価値は、一三フランドル・シリリング四ペンスにまで低下した。^⑥ 前図（前号参照）にみた二〇年代および四〇年代の急激な輸出カーヴの上昇は、まずこの悪鑄の結果であるとみて差支えない。事情もしこのようであるとすれば、世紀前半の好況も、王室と一部特権商人階級の利益は別として、国民経済的観点——いわゆる「コモンウィール」——に立てば、砂上の楼閣にすぎなかったことになる。国内インフレーションの進行は、結局悪鑄の結果である一時的好況の利益を相殺することになるであろう。それが証拠に、五〇年代には

すでに、国内では過剰生産の不満がきかれた。^⑦ 別言すれば、アントワープ市場の飽和状態を意味したのである。過剰生産の結果は、粗悪品の輸出となり、外国とくにドイツ商人の批判は、来るべき危機の前兆となりつつあった。^⑧ それはともかく、悪鑄が無際限につづくのではないかぎり、こうした貿易条件のもとにおいては、輸出は早晚なにほどの収縮をみせざるをえない。しかも、悪鑄にも限度があり、その限度を越せば、国民経済全体を破壊することは必定であった。一部の商人の思惑は別としても、こと少なくとも為政者の眼には、事態は異って映ったはずである。

周知のように、通貨改革に先鞭をつけたものとしての榮譽は、一五五一年エドワード六世の摂政ノーサンバーランド伯に帰せられる。「コモンウェルス派」の摂政サマセツト伯ではなく、その政敵でもあったノーサンバーランドが、みずからも敢行した五一年初期の、空前絶後の悪鑄政策から一転して、なぜ通貨改革にふみ切ったかは、いまは審かにすることはできないが、すでに同年なかごろには、高為替政策の抱懷者、かのサー・トーマス・グreshamが、王室財務官として、その助言者の地位にあったということは、

なにほどかの説明になるであろう。^①それはともかく、彼のつたデフレ政策が、外国貿易に現われた結果は明らかであった。果然、ロンドン港における毛織物輸出量は、前表にみるとおり、一五五〇年の一三二、七六七反より、五一年の一一二、七二〇反へ、さらに五二年には、八四、九六九反へと急激な下降のカーヴを描いている。それから約十年後、最終的なエリザベス朝の通貨の安定策^②によって、新しい均衡が達成されるまでは、なお幾多の曲折を経なければならなかったが、いずれにしろ、今日のわれわれに明らかなことは、ちょうど世紀の半ばを境として、英国経済のブームはついに去ったということである。かくて、ロンドン毛織物輸出は、最高ブーム時代の三〇%減を維持しつつ、エリザベス朝を迎えることになる。まことに、ストーンもいうように、「エリザベス治下の貿易の、すばらしい発展というのは、信心深い作り話にすぎない」^③英国史上、光輝あるこの時代も、経済史的にみれば、いわば慢性的な不況期であり、しかもこの趨勢は、ステュアート期の繁栄の回復にまで続く。このことについては、のちにまた触れるところがあろう。ただ、もうひとつここでいい忘れてはな

らないことがある。それは、周知のアントワープをめぐる政治事情の移り変りである。すなわち、かのオランダ独立戦争にいたる、宗教的・政治的紛乱の過程^④であるが、その紛乱のなかに、市場としてのアントワープもまた大きな政治的災厄を蒙らねばならなかったということである。また、広大な中欧の市場にも、三十年戦争の嵐が近づいていた。冒險商人は、なおその後もしばらく、エムデン、シュターデ、ハンブルクと、北欧の市場を転々したが、過去の繁栄は、ついに帰ることがなかった。時代は新しい方向に動いていたし、また動かねばならなかったのである。

① 出口勇蔵監修『近世ヒューマニズムの経済思想』、昭和三三、はこの書物の秀れた邦訳。作者の考証についても、本訳書「解説」、山下博氏の詳細な一文を参照せられたい。

② 前掲書、「第二の対話」冒頭参照、三九頁。

③ たとえば、W. Beveridge, *Prices and Wages in England*, vol. 1, 1939. 前掲書、武暢夫氏の解説参照、二三七頁。價格革命の歴史的意味については、さしあたり大塚教授前掲書、四八一—五〇頁および文献参照。

④ この点を明確に指摘してゐるものとしては、Fisher, op. cit., p. 156; Bindoff, op. cit., p. 122. 「理論的」な Ricardo, *Principles of Political Economy* (Everymans Ed.) p. 229.

⑤ 前掲訳書、八五頁。また、登場人物ドクターにも同様なことばがみられる。「そういうわけで、わが国の百姓やジェントルマンやはかのすべての身分の人たちが、自国品は安く売って、外国品はみな高く買わねばならないという状態では、いつまでも繁昌できるわけがありませんよ」。同書、四九頁。

⑥ Fisher, op. cit., pp. 155-56; A. E. Feavearyear, The Pound Sterling, a History of English Money, 1931, p. 64. なお、前掲訳書、二三二頁の付表参照。ここには、貨幣改悪史の大体の年代がまとめられている。

⑦ Acts of the Privy Council, 1550-1552, p. 20, Fisher, op. cit., p. 159; Ramsay, op. cit., p. 21.

⑧ 一五四六年には、フントワープ市場において、ウィリアム・スタンブの製品でさえ、ドイツ商人の批判の対象となった。J. Strieder, Aus Antwerpener Notariatsarchiven, S. 196. ともかく、英国産毛織物のフントワープ市場における質の低下は、この文書からえられる一般的印象であるといわれる。Ramsay, p. 21.

⑨ グレンシャムとノーサンバーランドとの関係については、J. W. Burgon, The Life and Times of Sir Thomas Gresham, vol. i, Chap. II 参照。グレンシャムの為替政策については、*ibid.* Cf. R. de Roover, Gresham on Foreign Exchange, 1949. 渡辺源次郎「トーマス・グレンシャムの為替論」(『イギリス初期重商主義研究』、昭和三四)は専門的立場からするその詳細な研究。

⑩ エリザベス朝の通貨政策については、小松芳喬「イリザベス

朝の通貨」(『封建英国とその崩壊過程』、昭和三四)・二〇九頁以下。

⑪ L. Stone, Elizabethan Overseas Trade, Econ. Hist. Rev., 2nd ser., vol. iii, 1949, p. 50.

⑫ フントワープ市場の混乱については、たとえば、E. E. Rich, The Ordinance Book of the Merchant of the Staple, 1937, Chap. iv, pp. 36-64.

十六世紀中期に訪れたこの経済的危機を、国家的破産のごとく見なすのであれば、もちろんそれは行きすぎた見方というべきであろう。為替レートの改善は、永い眼で見れば、この国の貿易に幸じたであらうし、実質的な国民所得のうえでは、危機の前後でそれほど差異を生じたとも思われない。ただ問題としてのこるのは、この實際輸出力の物理的減少が、貿易業、毛織物工業、農業、海運業などに及ぼさざるをえなかった諸結果である。いつてみれば、いったん膨れ上ったまま遊休状態にある資本を、今後どうさばいていくか、いかにして常態に復帰させるか、そこに実は世紀後半の政治に課せられた特殊英国的な課題があったはずである。そして、もしも先取していえるのであれば、この課題解決の仕方にこそ、後世からみれば、いわゆる「絶対主義」

ともいへば諸政策が顕現してくるのであり、とりわけ、エリザベス朝を染め上げた独自のカラーがあったと思うのである^①。念のため、もう少しいっておけば、一般に「絶対主義」だから、そこにかくかくの客観的政策体系があったというのではない。これは論理の逆である。いいたいのは、その政策自体が、実はすぐれて英国的な環境の所産だったということであり、そこにどう処するかは、これまた政策主体の問題だったということである。政策主体といったが、この五〇年代の不況が、思想的にみても、英国朝野の思想的風土をかえるのに果たした役割は実に大きなものがあつたと思う。すでに、トーニーが古典的な表現を与えているように、世紀前半の思想を特徴づけていたものは、依然として中世的伝統のうえに立つ社会的正義の理念であつた。

三、四〇年代の言論を代表したヒューマニストやあの「コモンウェルスメン」をとり上げてみても、ルネサンス人と宗教改革派左派のあいだにさえ、社会教説のうえにおいては、それほど差異があつたわけではない^②。かれらが同じく聖職者出身であつたということも共通している。その論題は貪欲であり、徴利であり、また主として農業問題であつた。

これに反し、五〇年代以降に盛行したものは、端的にもつと技術的な論題、かつては賤しめられた貨幣の問題、法の問題、貿易の問題、そしてなによりも具体的な政策の問題であつた。論者もまた宗教的モラリストから商人・政治家へと一転した。この意味においても、かのグレンシャム、セシル・ロス、新時代を代表する典型的人間類型であつたといつてよからう^③。かれらこそまたこの時代以降に根を下ろした新制教育のチャンピオンでもあつた^④。このような一変した雰囲気の中かで、不況後の環境への自己調整は、どのような形をとつていったであらうか。ここでは、さし当り、国内経済の対応をみることにしたいと思う。

第一に、農業問題である。世紀前半の好況が、囲込運動に拍車をかけたことはすでにみたが、囲込運動研究史の示唆しているところによれば、これに対する反囲込立法は、一五五〇年を画期に、一段と強化されたといわれている^⑤。

一五五二年および五三年の立法によつて、はじめて法制化された囲込調査常任委員会の設立とその広汎な権限とがそれである。こうした立法が、どれほどの実効を治めたかはまた別な問題であるが、不況に即応したその政策意図は、想

像できるのである。ブラッドレー女史の説くように、世紀中葉以後にみられる放牧地の耕地転換が、その地味枯渴説から説明できるにしても、それが不況の結果である羊毛需要の減少と関係なかったとは、いえないと思うのである。しかし、なにぶんにもますます複雑化した囲込運動研究の現状においては、性急な結論は控えなければならぬ。ただ、以上の観点から、囲込運動展開史に、意味ある時期区分が描けはしないかということを付言するにとどめる。つぎに、これも問題多い、いわゆる「ジェントリーの勃興」についての議論である。この現象自体は、トニーもいうように、四〇年代以降の現象であり、とくにこの期の好況が、その勃興に与ったことは、ほとんど間違いないであろう。しかし、五〇年代以後の不況期に、かれらがどう自らを処置していったか。おそらくは、そこにトレヴァー・ロウパーのいう宮廷寄生的な官職ジェントリーの閉鎖的グループを生んだであろうことも、これまた推論できるのである。この著名な論争も、現象を並列的なものとしてではなく、むしろ継起的なものとして解釈し直すとすれば、なにかそこに解決の手掛りがあるのではないか。しかし、これについ

ては、いずれ稿を改めて論じなければならない。

第二に、工業面に現われた変化はどうであったか。これも個々の現象については、すでによく知られている。また、それがすぐれて「絶対主義的規制」とも呼ばれるべき政策に統制されていたことについても、これまた多くの論考がある。しかし、ここでも強調しておきたいのは、こうした「規制」を喚起した決定的契機が、ほかならぬ不況であったということである。新興工業を、なんらかの意味で規制しようとする理念は古くからあった。いわゆる絶対主義的有機的社會を維持しようとする保守的集団は、政府と議會において、まだ相当な勢力を占めていた。従来の特権都市と新興農村工業との対立も、これまたいまに始ったことではない。ここで問題にしたいのは、世紀後半の特徴となるべきドラスティックな規制立法がとくになにによって促されたかということである。一般に、不況が競争ではなく、規制を生むことは、二〇世紀のわれわれの経験に徴しても理解されることである。不況の深度を現わす計量的データとしては、差当って前掲表の数字以外にはないが、一五五二年の議會には、早くも大量の經濟法案が上程され、膨れ上

った毛織物工業の適正規模内への規制、細目規定による製品規格の維持、徒弟奉公あるいは七年間の経験者以外の織布業への従事を禁止した^⑨。本法は都市・農村両工業に適用されたため、依然として両者の反目をいやすに足らず、かえって双方の失業者を増加させたので、翌五三年には、都市工業のみ、この七年制規約から除外された。さらに、五年の包括的な「織布工条令」を待って、農村工業にいかなる干渉が加えられたかは、研究史上すでに周知のところであろうと思う^⑩。直接アントワープ市場に連っていたものが、しばしばドイツ商人の批判を買い、かつ生産過剰におち入りつつあった農村工業の粗製品であったことを想起する必要がある。最後に言及しておきたいのが、こうした規制立法の頂点、いうまでもなく、一五六三年におけるエリザベス「徒弟法」の成立である。これについては、わが国においても、すでに秀れたいくつかの研究がみられる^⑪。しかし、ここでもまた、いつておきたいのは、本法発布の年こそ、われわれの前掲図表の示すところによれば、世紀後半をおおう慢性的不況の、そのまだどん底の年だったということである。当時、スペイン領ネーデルランドの事実

上の支配者グランヴェルの強硬策に会って、この前年アントワープ市場は、英国商品に完全に閉ざれていた^⑫。徒弟法のなかに、絶対主義の階級的利害をみることは、容易である。しかし、未曾有の危機において、労働配分のプライオリティを考えた政策論としてみた場合には、その評価もまた多少は変わってくるはずである。本法が、かならずしも反動的立法として、断罪し去れるものでないことも、最近の研究は教えている^⑬。もうひとつ。一般に危機の時代こそは、思想にとっても、技術にとっても、かえって肥沃な土壌であることは、歴史上しばしばみかけることであるが、工業においては、正に旧毛織物にかわる新毛織物生産の技術が、重工業の萌芽が、英国に根を下しつつあったのは、この時代のことである^⑭。近代英国の未来が、新毛織物とともにあることは、やがて次章をまって明らかになるであろう。ともかくも、こうして十六世紀中期を襲った経済的危機は、近代英国経済史に、新しい一ページを開きつつあったのである。

① 本論を草しながら、筆者のイメージに浮んでくるのは、エリザベス期の統制的把握の問題である。これは、いずれ果されねばならぬ課題であると思う。

③ R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*,

1948 (Pelican Ed.), pp. 158 seq. 出口 越智共訳『宗教と資本主義の興隆』岩波文庫 昭三三四下巻 三六頁以下参照。

③ *ibid.*, pp. 149-51. 前掲邦訳『二〇一三頁。ネサニスの社会教説について』就中ヤム『モーヤム』(平井正穂訳)岩波文庫 昭三三三 Thomas Starkey, *A Dialogue between Reginald Pole and Thomas Lupset*, ed. Kathleen M. Burton, 1948. 「ハヤハハニヤム」について Cf. A. B. Ferguson, *Renaissance Realism in the 'Commonwealth' Literature of Early Tudor England*, *Journal of the History of Ideas*, xvi, 1955, pp. 287-305.

④ ハンヤムについて はミヤの 前掲 J. W. Burgon, *Life and Times of Sir Thomas Gresham*, 2 vols, 1839 ヤンロについて Conyers Read, *Mr. Secretary Cecil and Queen Elizabeth*, 1955; do., *Lord Burghley and Queen Elizabeth*, 1960. 大野真二「ハリスヤム朝の官僚—ウィリアム・セシルについて」(『横浜市立大学論叢』昭三七、三八)。

⑤ 世紀中葉以降の英国教育制度の変容については、拙稿「シハントルヤン・イテアールの形成」(『立命館文学』昭三三七)参照。

⑥ R. H. Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*, 1912, p. 354.

⑦ Harriet Bradley, *The Enclosures in England*, an Eco-

nomie Reconstruction, 1918, 小松芳壽「イギリス農業革命の研究」三六頁以下参照。 Cf. Fisher, *op. cit.*, p. 161.

⑧ ついてについては、差当り、拙稿「シハントリー論争」(『社会経済史大系』V、昭三三四所収)を参照されたい。

⑨ 5 & 6 Ed. VI, c. 6; 5 & 6 Ed. VI, c. 8; Mary, sessio tertia, c. 7. Cf. Fisher, *op. cit.*, p. 168.

⑩ 2 & 3 Ph. and Mary, c. 11. "An Acte Touching Weavers", Tawney and Power, *Tudor Economic Documents*, vol. i, pp. 185-7. 参照。大塚久雄「前掲書」三二五頁以下とその詳細な叙述をみられたい。

⑪ Tudor Economic Documents, vol. i, section VII. The Statute of Artificers. 角山栄「ハリスヤム徒弟法の成立」(『イギリス絶対主義の構造』昭三三三)岡田亨好「一五六三年の『職人規制法』(『イギリス初期労働立法の歴史的展開』昭三三六)田中豊治「絶対王制の経済政策」(『西洋経済史講座』Ⅲ「所収」)田村満穂「テューター絶対主義の経済政策」(『奈良女子大学文学会研究年報』昭三五、三六)。

⑫ Rich, *op. cit.*, pp. 50 seqq.

⑬ たとえば、角山栄「前掲書」二一四頁以下参照。

⑭ Fisher, *op. cit.*, p. 163. なおこの時代における重工業の発展については Cf. J. U. Nef, *The Progress of Technology and the Growth of the Large-scale Industry in Great Britain, 1540-1640*, *Econ. Hist. Rev.*, vol. v, ser. I, 1934.

三 海外発展への衝動

およそ、英国という国を考えると、地表上に延々と拡がる、ある英連邦の巨姿にわれわれは目を閉じることにはできない。今日、英国とは、形式的にも内容的にも、決して「イングランド」ではありえない。しかも、これら英連邦の各国が、英本国と植民地という、紐帯につながれていたのも、思えばつい最近までのことである。人類の達成した明暗さまざまな諸業績のなかで、これくらいデモニーシユなものを感じさせるものが、またとあらうか。それならば、いつ、いかなる事情の連鎖によって、英帝国への端緒はひらかれたか。近代英国の起源に関心をもつものに課せられた、のつびきならぬ問題がここに生じてくる。そのとき、われわれは、ふたたびこの十六世紀中期という時代につれもどされてくるのである。

十六世紀中葉を襲った経済不況は、国内においては、農工業の再編を結果したが、対外貿易においてもまた同じであつた。ここで少しく先に帰って、世紀前半の貿易政策をふりかえってみると、そこにはひとつの共通した特色とも

いうべきものがみられた。フィッシャーによれば、この時代は「英国近代史における偉大な自由貿易の時代のひとつ」であつた。^① そのような比喩はともかく、一四九七年の法令による冒險商人組合に対する特権の削減、一五三五年の未仕上毛織物輸出の制限緩和、一五四五年の利子禁止令の崩壊、ハンザ商人に対する事実上の攻撃中止、三、四〇年における外国商人への種々な課税の廃止、こうした一連の事実は、十六世紀前半が、比較的その対外貿易において自由な時代であつたことを裏書きしている。これに反して、十六世紀後半の特徴となるべきものは、すでに農工業にもみられたように、対外貿易も含めて、国民経済の「統制」の強化であつた、と。これが、大要フィッシャーの説く論旨である。ところで、このようなフィッシャーの見解に対しては、つとにストーンの反論があり、彼は世紀の前後半を通じての貿易政策の「方法と意図の連続」を主張した。すなわち、ストーンによれば、貿易統制の意図は、世紀を通じて変らなかつたのである、と。いま、その反論の可否については、詳しくは立入るつもりはない。しかし、重要なことは、自由か統制かといったことばの問題ではなく、世

紀を分つ二つの時期の比較の度合であらうと思う。なるほど、世紀前半においても、ストーンのいうように、統制への政策意図が全然なかったとはいえない。たとえば、ハンザ商人のたえざる不平は、これを示すものであらう。^③しかし、英国が経済的国民主義をふりかざすには、好況のもたらすものは、政策の当路者には、余りにも大きかった。危機は、やはり不況とともに訪れたとみてよいのである。そして、ストーンもまた、世紀後半における統制の強化を認める点においては、別に異論があるとも思えないのである。それでは、いったい世紀後半の貿易機構には、どのような変化が起ったか。

すでにのべたように、不況期の英国にとって重要なのは、ロンドン・アントワープ・レートの問題であった。このレートを決定するものは、主として両国間の貿易である。当時主要な輸出品毛織物の大部分は、いうまでもなく、冒険商人組合の手にあった。不況を救う道として、まず当組合がひとつの媒介環として浮び上ってくるのは、当然の成り行きである。すなわち、組合を利用して、有利なレートで政府の負債を支払わせること、そのためには、当組合に独

占権を与えて、国内外の競争から護らねばならぬ。加えて、王室財政もその関税統制によって潤わねばならぬ。実にこのような方策こそ、グレンシャムをはじめ、為政者の方寸にあったものといつてよい。^④そして、その政策は、エドワード、メアリー、エリザベスとテューダー三代にわたる、彼の在職期間中にほぼ実現されたとみてよいのである。すなわち、冒険商人組合は、一五六四年の特許状によって、その商域を従来のネーデルランド地方からさらに拡大することができ、八六年には、さらに新たな特許状によって、国内のインタローウパーとの競争からも護られた。いわゆるインタローウパーこそは、不況にあえぐ毛織物業者と携えて、自由貿易を標榜しつつ、組合の独占に迫るものであった。いっぽう、前時代の好況の結果、組合内部にも多くの新加入者を迎え入れていたが、いったん不況に際会した今は、旧組合員は既得権益を新来者には譲渡しまいとする。既成の大商人およびジェントリーにとっては、組合こそはその子弟の雇傭と教育の場であったこと、ウィーラーの弁明にもあるとおりである。^⑤こうした闘争は、やがて十七世紀の革命をもって決着されるはずであったが、要するに、

不況の生んだものは、冒險商人組合にかざらず、一般にかの「カンパニー」という排他的フレームを貿易機構のうえに確立したことであった。しかし、一五六六年、グレシャムが誇らしげに語ったように、こうした手段を通じて、国庫はその負債のほとんどを償却することができたのである。他方、中世以来の巨大な特権と貿易量を享受していた、ドイツ・ハンザに対する闘争は、不況の翌年一五五二年から開始され、カトリック・メアリー時代には、スペインとの姻戚関係もあって、一時中断されたが、エリザベスの即位とともに、また白熱化して、迂余曲折を経つつ、結局一五九八年には完全なステイル・ヤードの一掃をみた。元来、ヘンリー二代にわたる対外政策は、当時ネーデルランドとスペインを支配した、強大なハプスブルク・ドイツ帝国とは、できるだけことを構えたくない、ということであった。ハンザに対する干渉は、中世の経験に照しても明らかかなように、歩みはじめたばかりの近代国家にとっては、余りに深い泥沼に引入られることを意味していた。それになによりも、アントワープ市場の存否も、その宗主権者たる皇帝の意志にあった。たとえば、一五二八年ウルジーと皇帝

との衝突は、ネーデルランド市場の閉鎖をもって酬いられたが、それが英国毛織物工業地帯によび起した失業と恐慌は、このルネサンス政治家をも一驚させるに十分なものをもっていた。二か月後、ウルジーは通商禁止条項からアントワープの除外方をとりつけねばならなかったし、五か月後には、ともかくも和平に漕ぎつけねばならなかった。事件は程経た一五六〇年の国王評議会においてさえ、想起されたのである。しかし、こうした事態も、今や不況を機に一変しつつあった。商利あつてこそそのネーデルランドとの貿易であり、かつスペインとの友好関係であった。以後、両国の関係が、急速に冷却していったとしても、不思議ではない。それが、やがて、かの一五八八年、有名なアルマダの戦役に結果したことについては、ここにいふまでもなかろう。これを要するに、十六世紀の不況が生みおとしたものは、貿易においてもまた、農工業におけると同じく、一種の統制と再編の強化であり、それと表裏をなす経済的国民主義の発展であった。世紀後半は、思想的にみてもショーヴィニズムの時代であった。^⑥また、とくに国民思想としての清教主義が、呱呱の声を上げるのも、この時代の

ことである。しかし、この不況の生んだものに、近代英国史を考えるうえに、いまひとつ重要なものがあるとすれば、それこそ節の題目にも示した、海外発展という事実にはかならない。

- ① Fisher, op. cit., p. 158.
- ② Lawrence Stone, *State Control in Sixteenth Century England*, Econ. Hist. Rev., vol. xvii, 1957.
- ③ *Documents of Tudor Economic Documents*, vol. ii, section I, no. 11. "Complaints by the Hansards, 1450" 参照。
- ④ Bindoff, op. cit., p. 143; G. Unwin, *Studies in Economic History*, p. 149. なお、角山栄『イギリス絶対主義の構造』、*リチャーズ*参照。
- ⑤ *Tudor Econ. Documents*, iii, section II, 17, Wheeler's *Defence of the Merchant Adventurers*, 1601, p. 285. 組合内部の闘争について、Fisher, op. cit., 169.
- ⑥ *Tudor Econ. Documents*, ii, Section I, 12, *Revocation of the privileges of the Hansards*, 24 Feb., 1552.
- ⑦ Rich, op. cit., p. 38.
- ⑧ Cf. A. B. Ferguson, *The Indian Summer of English Chivalry*, 1960, chap. v.

「すべてのひとめいように、熟慮の結果、本王国にとって良策といえるのは、王国の商品を、一個所ではなく、

多くの場処に輸出することである。とくに、その領主が、絶大な権力をもって、手段を弄して、本王国の邪魔立てをするようなところには、輸出すべきではない。」一五六四年、セシルはこのように書いている。^① あたかも、徒弟法の成立した不況の翌年のことである。同じころ、ネーデルラントでは、グランヴェルのセシルに対する、赤裸々な敵愾心が燃え上っていた。^② 五〇年代の不況と、そこから発展した両国外交関係の冷却は、英国においても、為政者、シェーの见解を大きく揺るがすにはおかなかった。アントワープにかわるべき市場を、他処に求めなければならぬ。この至上命題をかかえた英国にとって、不況の五〇年代が、海外発展と外国貿易の宿命的な転換点となったのも不思議ではない。ある意味では、それは十九世紀末英国を見舞った不況とその対応に似通ったものをもっているといってもよからう。

英国における海外発展熱の覚醒は、先進国ポルトガル、スペインにはいうに及ばず、フランス、イタリヤ、内陸的なドイツに較べてさえ、約半世紀の大きな遅れをとっている。^③ 当時全欧的な共通の関心事に、なぜ英国はこども遅れ

たか。答えは簡単である。ひとつは、先にものべたように、
 總便を旨とした対ハブスブルク政策、ふたつには、余りに
 も大きなアントワープ市場の魅力であった。一四九七年、
 八年、九年(?)と、相続いて行われた、この国にとって
 は先駆的なジョン・セバステイアン・カボット父子による
 北米探検でさえ、のちハクリットを嘆ぜしめたように、本
 国自身の記録としては、ほとんどない。^④ 一般の関心の低さを
 物語っているといえよう。またカボットら自身生粋の英国
 人ではなく、いわば先進的な南欧の空から、草深い十五世
 紀末英国に降ってわいたような存在であった。かれらの探
 検を報じた史料でさえ、あるいはスペイン、あるいはイタ
 リア諸都市からきた外交使臣の本国宛書簡である。ただ、
 カボット自らもその一員となったブリストル市民が、スペ
 イン新大陸貿易の事情通として、早くからその探検に眼を
 向けていたことは、事実である。しかし、これも王室から
 の干渉によって、ほとんど沙汰止みとなっている。もつと
 も、十六世紀二〇年代には、ヘンリー八世の提案によつて、
 ロンドン資本がニューファウンドランド探検に注がれたこ
 とがあり、三〇年代には、ソーンとバーロウが、のちの

「北西航路」開拓の瀬踏み役を果たした。^⑤ 四〇年代のはじ
 めには、バーロウはふたたびその企図をとりあげ、アイス
 ランド・グリーンランド間航路の開拓のため、スペイン人
 パイロットを傭つたりもした。三〇年代に行われたホーキ
 ンスのブラジル探検も、特記すべきことであらう。^⑥ しかし、
 ここで注意すべきは、これらの探検も、間隔的に訪れたア
 ントワープ市場の不況と相即したものであったということ
 である。だが、世期前半にあつては、なんといつても不況
 の期間も短かく、市況の回復がみられればそのような企画
 もながく資本の誘因となることはできなかった。^⑦ この意味
 においても、五〇年代にはじまる慢性的不況が、これまた
 英国海外発展の一大発条となったことは、ほとんど断定し
 て差支えないと思う。

新市場開拓の第一回探検は、こうして不況の年一五二二
 年から五三年の冬、いわゆる「北東航路」の探検をもつて
 はじまった。北氷洋を突き切り、范莫の国キャセイ(中国)
 を経て、東印度に到ろうとする途方もない企図である。組
 合にはセバステイアン・カボットを総督に、グresham一
 家、ウィンチェスター侯、アランデル伯、ベッドフォード

伯、ペンブルック伯、サー・ウィリアム・セシルら、ロンドン政財界の著名人が煌星のように名を連ねた。^⑧サー・ヒュー・ウィロビーを総司揮官に、五三年ラトクリフ港を出航したこの船隊が、どのような数奇な結末をもったかは、すでによく知られている。ウィロビーの遭難死、リチャード・チャンセラーの、キャセイではなく、思いがけないモスクワ公国への到達、その結果としての五五年の「ロシア会社」の成立、またジェンキンソンら別動隊による中央アジアの探検。これがあらましの顛末であった。しかし、対外貿易のうえからいえば、酷寒の冬をもつ広大なツァーの領域が、国内にだぶついた毛織物のかなりな輸出先となりうることを発見したことは、この探検の成果であったといえよう。^⑨また、これにつれて、当時ロシアの手中にあったナルヴァを基地とするバルト海貿易も復活する。ちなみに、以下の表にもみられるように、十七世紀初頭のロンドン港毛織物輸出統計によれば、それは十六世紀後半の不調を回復しているだけではなく、輸出総量の平均七〇%ないし八〇%が、この北東方面に向けられていることが分る。かくて、ロシア会社は、英国革命の嵐が、はるかにロシア絶対

主義帝権を畏怖せしめた一六四九年まで続くことになる。花々しく開始された北東貿易に較べれば、地味ではあったが、英国経済の将来に、より恒久的な意味をもったのは、地中海市場の開拓であった。地中海域は、すでにみたように、十六世紀前半、アントワープを経由する英国産毛織物に対する中欧とならぶ最大の顧客であった。しかし、そこにおける英国商人の活躍の場は、少数の冒険者は別として、^⑩これまたはなほ小さいものであった。いや、英国商人だけではない。一般にキリスト教国商人のこの海域における航行は、東邦貿易の伝統をもつイタリア商船隊を除けば、一五三八年のトルコの内海進出以来危殆に陥れられていた。当時アントワープ・イタリア間の貿易が主として陸路によったのはこのためである。英国商船の地中海、さらにはアフリカ沿岸への進出は、これもやはり世紀後半に属する。すなわち、一五五一年、これまたロンドン政財界の援助のもとに行われた、ウィングダムのモロッコ航行が、少くとも記録史料にのこる第一回のものであり、翌年にはさらに大規模な探検隊が組織されバールバリーに向った。^⑪こうした南方進出自体、スペイン勢力を顧慮した世紀前半の政策からは

考えられないところであつた。北西・北東航路の探検ということでさえ、実はその顧慮にでたものである。したがって、こうした政策転換がマドリッド、リスボン当局を刺激したことも想像がつく。しかし、少くともメアリー朝には配偶者フェリーベ二世の黙認も手伝い、その治世が終るころには、英国商社はモロッコからギニアにいたるアフリカ西岸に点在することとなつた。一五七一年は、史上有名なレバント沖海戦の年である。そして、この年を機として、東地中海におけるトルコの脅威もまた去ることになる。しかも、この対トルコ戦争を戦つたヴェネチアの衰微があつた。すでに、バーバリー貿易を通して、東地中海市場にも精通しつゝあつた英国にチャンスを与えたのは、ひとつにはこうした政治情勢の変化であつた。一五七三年、その後の対イタリア貿易の基地となるベッキリヴォルノに現われた英国人は、七八年には早くもトルコとの交渉にこぎつけ、強力なロンドン商人のイニシアチヴのもとに、八〇年にはフランス、ヴェネチアの反対を押し切つて、その領土内に治外法権の獲得に成功した。エリザベスより、かの「レヴァント会社」^③創立について特許状が下りたのは、その翌年。

メンバーには交渉の当事者たるロンドン大商人とともに多くのバーバリー商人が参加し、商社もまたコンスタンティノープル、スミルナ、アレクソと急速に拡がっていった。世紀末、スペインとの交戦時代を通じて、和戦両様の対応をみせたこれら冒険商人の地歩は、一六〇四年の和平が訪れたとき、この古典の国々において、もはや揺るぎないものとなつていたのである。

① Tudor Economic Documents, vol. ii, section 1, 16, "Memorandum by Cecil on the export trade in cloth and wool." 1564 (?), p. 45.

② たとえば、グランヴェル書簡集にみえる次のような非難をみよ。⁴ "homme bas et rusé, versé dans la connaissance des lettres grecques et latines, grand hérétique, orgueilleux comme ceux de sa nation, neuf dans les affaires et les traitant d'après les doctrines de Machiavel". Correspondance de Granvelle, I, p. 589. Rich, op. cit., p. 47.

③ Williamson, Maritime Enterprise, p. 51. トーニーも「地理上の発見につづく商業革命とともに、新しい時代ははじめた。はじめは好奇心にかられての大騒ぎがあつたが、それもすぎると、直接には財宝をもたらない探検に対しては、興味はいだかなくなった。それから半世紀以上も経って、はじめて英国人は、新世界の銀を、セビリアといわず、ロンドン

ン塔の中に預けておく」ともできるのだと考え、またアメリカと東洋とに対する競争に ついての熱心な議論がはじまった」。

Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*, pp. 140-41.
邦訳、下巻、七頁。

④ カボットの探検については、就中ウイリアムソンへの批判的研究を参照。Williamson, *op. cit.*, pp. 51-103.

⑤ 北西航路探検史については角山前掲書、六〇頁以下参照。

⑥ Cf. Williamson, *Hawkins of Plymouth*, 1949.

⑦ Fisher, *op. cit.*, p. 162.

⑧ Ramsay, *op. cit.*, p. 26. なお、この探検史についても詳細は角山氏前掲書を参照された。

⑨ ロビン貿易の見返り品としては、魚油、灰汁、脂臘、大麻、亜麻、ローンなどがあり、とくに商船に不可欠なローン製造のため英国の職人がロビンに送られた。ibid., p. 26. なお、ロビン貿易については、Cf. T. S. Willan, *Trade between England and Russia in the Second Half of the Sixteenth Century*, E. H. R., 1948, pp. 307-21; do., *The Early History of the Russia Company*, 1956; do., *The Moscow Merchants*, 1953.

⑩ Robert Sturmy, *Roger Bodenham* など前記チャンパーナは逸せられたる名前である。Cf. Ramsay, pp. 34-38.

⑪ Ramsay, *op. cit.*, p. 28. この時代の地中海史については、Cf. F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 1949.

⑫ レヴァント会社については、Cf. M. Epstein, *The Early History of the Levant Company*, 1908; A. C. Wood, *A History of the Levant Company*, 1935; T. S. Willan, *Some Aspects of English Trade with the Levant in the Sixteenth Century*, E. H. R., LXX, 1955, pp. 399-410.

十六世紀後半の不況が、英国の海外発展に及ぼした影響はなんであったか。ひとつは、北東貿易の展開であり、いまひとつは、地中海域への進出であった。これが以上の説明の導いた結論であったと思う。ところで、これら新たに展開した二つの貿易系列を比較してみると、それが単に方向の差異であるだけでなく、貿易内容においても、一見著

(A) ロンドン港旧毛織物輸出地域 (%)

年代 \ 地域	1614	1616	1620	1622	1632	1640
北東地域	76	76	78	80	77	73
地中海域	16	18	17	16	18	25

(B) ロンドン港他商品輸出地域 (%)

年代 \ 地域	1609	1612	1619	1634	1640
北東地域	29	23	25	24	22
地中海域	46	55	59	65	65

しい対照をなしていることを発見する。これこそ、ほかならぬ不況を機に、これまた国内経済のうえに起りつつあった体質変化と関係するものであり、最後にこの点に言及して、本

論を結びたいと思う。そこでまず、前掲表をみてもらいたい。この数字もまた、フィッシャーのいまひとつの労作に負うものであるが、同じくロンドン港における、十七世紀初年より革命の年にいたる輸出の地域別統計を現わしている。ついでながら、首都の港湾は、この時代になっても全国貿易量の三分の二、ないし四分の三をはき出していた。表中北東地域とは、ロシア、バルト海、北海諸港、地中海域は、スペイン、アフリカ諸港を含むものとする。まず(A)表から明らかのように、旧毛織物すなわち従来の主要輸出品は、今やわれわれが北東地域と呼んだ前者の諸港に、これに反して、その他の商品は、地中海域に主として積出されていることが、(B)表より分る。そこで、次に(B)表にいうその他の商品の内訳であるが、たまたま一六四〇年に得られた付註に示す統計によれば、これまた羊毛製品が圧倒的多量を占め、農鉱工産物、再輸出品それぞれに対し、約六・一一の割合を示している。そして、ここにいう羊毛製品こそは、伝統的旧毛織物に対し、時人が「新毛織物」と呼んだものにほかならない。従来の厚手旧毛織物に対して、種々なヴァリエティーをもつ薄手毛織物と簡単に説明を与えておくが、

この生産が不況期の英国に根づきつつあったことは、前にみたとおりである。一般に、新毛織物の生産工程は、労働節約的であるというよりも、資本節約的であるといわれている。機械力というものの利用できぬ当時の技術的隘路にはばまれて、旧毛織物の生産コストがすでにぎりぎりのところまでゆきついていたことには種々の傍証がある。④「英国毛織物の安価さこそ、その品質のよさと並んで、ずっとそれがよく売れてきた原因である」。一六二四年の下院が宣言したように、国際競争に勝利するためには、価格が考えられねばならぬ。しかも、旧毛織物生産の場合には、それ以上インテンシヴな改良が、したがってコスト・ダウンが不可能であつたとすれば、生産はいきおいエクステンシヴな方向、すなわち一生産品の開発というよりも、他種製品の生産へと移行しなければならぬ。新毛織物がクローズアップされた経済的原因を、ほぼ以上のようなものとみて誤りなからう。それはまた、資本少なく、労働力豊富な不況期の生産形態として、急速に拡つていったと考えられるのである。温暖な地中海領域が、海外発展の対象となつたとき、すでに英国はそれに適応すべき技術的・生産的諸問題

をも解決していたということができよう。旧毛織物も地中海域において決して販路を失ったというのではなく、とくに十七世紀トルコ貿易におけるその比重は、しばしば新毛織物を上まわる場合もあったといわれる。^⑤しかし、地中海域がすぐれて新毛織物の市場となったこと、前表の示すとおりである。しかも、その後訪れる北東貿易の衰微にもかかわらず、新しい地中海市場は順調な発展をつづけた。十七世紀ともなれば、トルコ貿易商人は、十六世紀の冒険商人にかわる、新しい財閥の代名詞とさえなった。「比類なく榮え、王国にとつてもっとも有益な会社」と、一六三八年ルイス・ロバーツがいったのは、ほかならぬレヴァント会社のことであったが、王政復古後のロンドン商人にとつて、トルコ駐在は榮達への不可欠な道となり、多くのジェントルマンもまたその子弟をここに送った。^⑥そして、ほかでもない、英国が、悠久な東洋の歴史と、英国産業が東洋の綿と、宿命的な出会いをもったのは、この貿易を通してであった。しかし、新大陸市場と同じく、東洋市場が、この国の歴史に大きな陰影を投じてくるのは、さらに次の世紀を待たねばならなかった。

近代英国がそれとして造形されるまでには、いくつかのエポックが経過され、またいくつかの造形要素が必要であった。経済史に即していえば、その最初のエポックこそ、実はここに述べた十六世紀中期を襲った経済危機であったといつてよからう。本稿は、その意味について論じたはずである。経済的国民主義の発展、遠隔地市場の展開、既成産業の再編、新産業の奨励、労働政策の樹立と、それはあたかもこの国の歴史においては、最近も繰り返されたエポックに似通っている。フィッシャーはこの時期に匹敵するものとして、十九世紀のはじめとおわり、ならびにかの今世紀二九年後の一連の変化をあげたが、^⑦この意味においても、本稿に論じた時期の重要度は、近代英国史の考察のうえに、決して無視できるものではないと思われるのである。

① Fisher, London's Export Trade in the Early Seventeenth Century, Econ. Hist. Rev., vol. iii, no. 2, pp. 153-54.
② 羊毛製品ならびにメリヤス類、四五四、九一四、その他の工業製品、二六、九七三、鉱産物三四、五五五、農産物一六、八七八、再輸出品、七六、四〇二(単位ポンド)。Fisher, op. cit., p. 154, Table 4.

③ 角山栄『イギリス毛織物工業史論』、二〇八頁。技術的問題

について、本書に詳しい。

- ④ ファインシャーの著る種々な傍証をみよ。 Fisher, op. cit., p. 156.

- ⑤ Ralph Davis, England and the Mediterranean, Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart

England in honour of R. H. Tawney, ed. F. J. Fisher, pp. 120 seqq.

- ⑥ G. Ambrose, English Traders at Aleppo, Ec. H. R., iii, p. 247.

- ⑦ Fisher, Commercial Trends, p. 160.

(京都大学助教授)